

〈翻訳論文〉

複合助詞トシテをめぐる

戴 宝 玉*

はじめに

日常生活における言語表現が複雑かつ精密化するにしたがって、日本語の中に複合的な新しい表現形式が少なからず現われた。これらの複合的な表現形式は、既存のものを素材として構成され、複数の素材が一旦固定化すると、かなりの安定性を見せ、そして、ある新しい意味を獲得するようになる。

日本語を一外国語として教育・研究の対象に据えた場合、こうした複合的な表現形式に対するわれわれの関心は、日本の学者のそれよりも強いように思われる。例えば、管見の限り、日本では古典に現われるトシテを取り上げた論文はあるが、現代語のトシテを取り上げた論文はまだないようだ。それに対して中国では、トシテが複合助詞であるかどうかをめぐる数年前にいくつかの論文が発表され、活発な議論が展開されている。

今日では、トシテは日本で出版された国語辞典を見るかぎり、すでに一助詞として取り扱われていることが多い。例えば、『学研国語大辞典』では、トシテは、連語、格助詞、副助詞として取り入れられ、そのうちの格助詞としての用法は、この小文で観察検討されるトシテと同一のものである。同辞典の関連事項を引用すると、次のとおりである。

《格助》 資格・立場などを示す。「あなたは二十年前に父としての権利を自分で棄てている〈父帰る〉」「あの子は家庭の旦那様としては誰に比べても恥かしい人じゃないと思います〈女の一生〉」

このように、トシテは格助詞として一般に認められている以上、もはやここで格助詞か否かの議論を繰り返す必要はない。筆者の関心はむしろ多くの用例の観察を通してトシテをいくつかの意味用法に分類し、そしてこうして分類された意味用法の間にどんな共通した関連があるかを探ることにある。なお複合助詞は生成発展の途上にあるため、まだ未知の部分が多い。この小文も、こうした複合助詞のうち、もっとも代表的なものの一つとしてトシテを取り上げ、その意味記述を筆者なりに試みたにすぎない。

* DAI Baoyu: 中国上海外国語学院日本語学部講師。

本書は、「試論日語複合助詞“として”」、『日語学習と研究』、日語学習と研究杂志社(対外経済貿易大学内)、中国、1987年刊よりの翻訳である。但し個別的な箇所では、若干の削除、文の調整を行っている。

1. 資格・立場のトシテ

(1) しかし、選ばれた少数者として私は慎重に行動し、時を待たなければならない。〈そばやまで〉

(2) 連合軍の司令部の連中と接触が多く、先方を客として招じることがしょっちゅうあった。〈巻頭随筆 II〉

(3) 二三日すると、その老人はまたやって来た。その時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。〈暗夜行路〉

観察の範囲を以上の用例に限定して考えるならば、資格・立場を示すという辞書の解釈は妥当だと言えよう。例(2)の「先方を客として」という表現を、「先方を客という身分・資格で」と言い換えても意味的にほとんど変わらないからである。

では、トシテがどのようにして資格・立場という意味を獲得するに至ったのか、例(2)についてさらに掘り下げて検討してみることにする。

例(2)の成分を「先方を A, 客として B, 招じる C」のようにそれぞれ記号で代表させて観察すると、A と B は実はある種の同格関係にあるということに誰もが容易に気づくであろう。このことは、例えば「先方を客として」を、「客である先方」と表現を変えてもほとんど同一の事柄を指していることから裏づけられる。ここの DEAL はいうまでもなく同格を表わしているからである。

ここで注意しなければならないのは、同格関係にあるということは、多くの場合、AB 両者を、A ハ B ダのように関係づけることが可能だということである。だから例(2)の文を次のように表現することもできよう。

(2)' 先方は客だ。その先方を招じる。

このような AB 間の関係が端的に現われているのは次のような用例である。

(4) ぼくは甲乙とも落第、とうとう聯隊員数の一兵卒として守衛の任に当ることになってしまった。〈巻頭随筆 II〉

(4)' ぼくは一兵卒だ。そして守衛の任に当った。

(5) 戦争末に私は一兵卒で華南に送られたが、〈巻頭随筆 II〉

(5)' 私は一兵卒だ。そして華南に送られた。

例(4)'(5)' は(4)(5)をもとに言い換えたものである。このように同じ表現に言い換えることができるのは、その母体となる例(4)(5)におけるトシテとデになにか共通したものを持っているからにほかならない。

さて、この共通したものはなにか。AB だけに注目すれば、A ハ B ダという関係づけからも分るように、B に断定助動詞ダとほぼ同様な機能が与えられていることが観察される。このこ

とは、例えば(3)が「その老人は祖父だ」という事実の上に成り立っていることから分る。こうして見ると、AB間の同格関係は、さらにつつこんで観察すれば、Aに対してそのAが何であるかを、Bが断定的に表現することでもあり、またAとBが等しい関係にあるということでもある、ということが結果として導き出されてくる。このような意味での同格関係を、必要に応じて仮にA=Bとしておくことにしよう。

問題は、このA=Bという同格関係が一文の中でCとかかわりを持つようになったときに、Bがどんな意味を帯びてくるかということである。AとCの間なら、ある種の格関係が構成されているのだから、原理的にこのAが省略されることはまずないと言ってよい。こうしたAとCの間にBを挿入した場合を考えてみよう。Cとのかかわりにおいて、BはAに対して、そのAが何であるかという情報を補足的な形で与えることになり、また、ABのそれぞれに主として人物、身分に関することが投入されるため、その結果としてBに資格・立場を表わすという意味特徴が取り出されてくることになる。こうしてトシテは資格・立場の意味を獲得するようになるのだが、このトシテが同格関係の上に成り立っていることはすでに見てきたとおりである。次のようなやや複雑な用例にもA=Bの関係を見出すこともさほど困難なことではないだろう。

(6) もっとも、近頃の若い人は(中略)洋風建築の完全隔絶性、あるいは相互不干渉の人間関係をむしろ好ましいこととして受け取る傾向がある。〈日本人の智慧〉

(7) 軍地氏や貴兄は、私を重宝な一事務員としてしか評価していないかも知れない。〈風媒花〉

(8) 建前は建前として立てておいて、現実には現実でやるという智慧ができています。〈日本人を考える〉

(9) (お城は)再建といっても、かつてのように権力の象徴としてではなく、市民のものとして戦前とはちがった意味と性格を持っているのだ。〈日本人の智慧〉

これまでの用例を見れば、Bはガ格、ヲ格(及びこれらの主題化したもの)のAとしか結びつかないことが分る。その他の格、例えばニ格、デ格などと結びつかないことは、次の文を比較すれば明らかである。

a. 明日、上海に中国の商業都市として行く。

b. 上海は、中国の商業都市として栄えた。

文aは日本語として成り立たないだろう。Bがニ格と普通結びつかないからである。ただし、そのニ格が、実質上ガ格の変化したものであれば、この制約から解放されることが可能なようである。

(10) 江戸時代の医者代表として杉田玄白に登場してもらおうことにしよう。〈巻頭随筆II〉

用例(10)は、生成文法の原理を借りて説明すれば、次のようになるだろう。つまり、いままで

指摘してきた ABC というのは、文として実現された表層レベルのものであり、これらの文の深層においては違った様相を呈していると考えることができる。すると表層で A に立つものを深層では a, B に立つものを b だとすれば、変形という手続を経て、a は A に、b は B に、それぞれ現実の文として実現されることになる。このように考えると、例 (10) は深層でガ格であったものが、表層ではニ格として現われていると解釈することができる。

なお、トシテの用例を見ると、普通 A が先に来て、B があとに続くが、その順序を逆転したのも少なくない。例 (1) (10) がその例である。ということは、トシテは他の格助詞と同様、語順においてはそれほど厳密ではなく、順序を入れ換えてもほとんど意味が変わらないということである。

最後に付け加えておくと、本節で取り上げたトシテは、これもまた一部の格助詞と同じだが、構文上の要請があれば、「B の A」のように、B が A を連体修飾することが可能である。例えば、

(11) 同一人か否かの判定に苦しむのは文学史家としての私がたびたびなめた苦い経験である。〈巻頭随筆 II〉

名詞に附属して後続の語句と格関係を構成する機能を有する点や、ガニヲを除いた他の格助詞と同様に連体助詞を下接することが可能だという点などから、トシテが格助詞として扱われるのには、もはや疑問の余地がないだろう。以下ここで取り上げたトシテを“トシテ I”と略し、以上述べてきたことをまとめてみる。

- 一 通常の文において、文中の名詞と常に A=B の同格関係を構成する。
- 二 A に立つものはガ格ヲ格及びそれ相当のものに限定される。
- 三 AB の語順は置き換え可能である。
- 四 B は「B の A」のように A を連体修飾することもできる。

再び ABC 三者の関係を見てみよう。すでに触れたように、A は C にとって必須的な格であるが、B は A の意味を補足するために挿入されたものであるから、C との関係において二次的な格と言ってよい。ここから、ABC の三者は現実の文と異なり、一直線に並んでいるのではないことが分る。三者の関係を図 1 のように示すことができよう。

図 1 において B が A により近いところに位置している。これは B の側から見れば、BC の結びつきよりも BA のそれの方がより緊密な関係にあると見られるからである。a—A, b—B はそれぞれ深層と表層のかかわりを示す。図 1 から三者は立体的多元的な複雑な関係にあることが

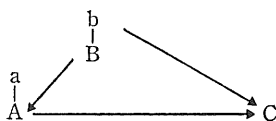


図 1

見てとれる。この点は、他の格助詞とのもっとも大きな相違であると同時に、トシテ I 以外の意味用法をも可能性として内包していることを示している。

2. 主題提示のトシテ

トシテ I に見られる三者の関係は図 1 のとおりだが、三者がそろってはじめて文として成立するというわけではけっしてない。双方の間に、ある事柄に対して事前にある了解が成り立っているならば、A の省略がしばしば行なわれることがある。例えば、

(12) われわれとして患者がどこで治療を受けようと、どうこう言う筋合ではないが、〈巻頭随筆 II〉

例 (12) では話し手が医者であり教授であることは、先行文脈によってすでに既知のこととなっており、いちいち説明する必要はない。したがって、例 (12) では少なくとも文表面において $A=B$ の関係を見出すことはできない。むしろこのような関係を復元しようと思えば、容易に復元できるのだが、この復元作業において、われわれは次のような興味ぶかい事実気づく。

つまりトシテ I においては、A には説明・解釈を受けるもの、例えば人物などが、B には説明・解釈をするもの、例えば身分・長幼の順序、物事の間接関係を表わすことばが、それぞれ用いられる。そして $a-A$, $b-B$ の過程を経て現実の文として実現されることになる。ところが例 (12) では本来他を説明・解釈するはずの B のところに被説明・解釈の人称代名詞が代入されている。ということは、この例 (12) では、 $b-B$ の関係ではなく、 $a-B$ の関係として実現されているということである。

例 (12) が文としてなんの違和感もなく成立しているのは、おそらく次のような事情によるだろう。つまり $A=B$ は同格関係にあり、そして両者とも C との間にも格関係が構成されている以上、B だけが現われていて、A が欠如した場合でもわれわれは深層において ab を同格関係をなすものとして捉え、そしてその ab のいずれかを B として実現させているのではなからうか。こうして $a-B$ として実現させている文は例 (13) であり、 $b-B$ として実現させている文は例 (14) だと言ってよいだろう。

(13) あたしとしてこんなことを言うの、どんなに辛いことだかは、わかってほしいの。
〈武蔵野夫人〉

(14) 一月も二月も身の回りの世話をされていれば、男として情が移るのはあたりまえです。
〈巻頭随筆 II〉

例 (13) を見て、われわれは特に異様に感じないのは、深層の方で ab 両者が同格関係にあるものとして捉えられていたということによるかも知れない。このように、トシテは文脈つきならある程度動作の主体を示す機能もあわせ持っているのだが、ただ、この機能はトシテが本来持つて

いるものとは考えられず、あくまでも前述のような特殊の事情によってもたらされた二次的なものにすぎない。だからトシテだけによる主題提示の文は不安定なものになりやすい。

トシテの以上の機能を補強し、文脈依存度を最小限に抑えるためには、ハの力を借りてトシテハの形にしなければならない。こうしてできたのが次の用例におけるトシテハである。

(15) 彼としては、健二が閨米の世話をしたり薪を割ったりしてくれたお礼に、時々お愛想をいっただけのことである。〈武蔵野夫人〉

(16) 御本人としてはなにか考えて、ちゃんと理窟は立つんだろうが、受けとった方は驚くよ。〈私の眼〉

(17) まだ新聞には発表しないでください。警察としては調べなおす点は大いに調べなおしてゆくつもりですから。〈霧と影〉

例 (15) (16) (17) はいずれも a—B として実現された文である。実際に主題提示のトシテが取り上げられ問題にされるのはこの種の文であろう。なぜなら、b—B として実現された文ならトシテ I の用法の A の省略された文として片づけられるからである。ここでは例 (15) (16) (17) に見られるトシテハをトシテ II としておく。

トシテハはこのように題目提示の機能を獲得したといっても、その背後に同格関係が依然として存在していることはすでに触れたとおりである。だから「私としては……」と言えば、聞き手には、話し手がある立場に立って発言しているのだという理解が瞬間的自動的に成立するものこのためだと言える。このような背景を持たない「私は……」という表現の意味の違いも、このへんにあるのではなからうか。図 1 にならってトシテ II を図 2 のように示しておく。

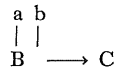


図 2

3. 解説のトシテ

次のようなトシテの用例もときどき見られる。

(18) 金を作る方法として芙美子が教えたことはある小さい三流の少年雑誌に(中略)小説を書いて持ってゆくことだった。〈砂漠の花〉

例 (18) は、これまでの用例に比較すると構造がかなり複雑だ。しかし、原文の意味を損わないかぎり、次のような分かりやすい文に書き換えることもできよう。

(18') 芙美子が、金を作る方法として、小説を書いて少年雑誌に持ってゆくことを、教えてくれた。

例 (18') なら「金を作る方法として」を B とすれば、「小説を書いて雑誌社に持ってゆくこと」

が A に当たるという関係を見出すことはそれほど困難ではない。例 (18)' だとトシテ I とあまり変らないように見えるが、次の二点においてトシテ I とかなり異なった様相を呈している。まず、A として実現されているのは、語レベルのものではなく句レベルのものであること、次に B として実現されているものは資格・立場を示すような具体的内容のものではなく、例えば、方法、理由、習慣、注意、性質、結果、条件といった抽象名詞に限られている、ということがあげられる。このような抽象名詞を b' とすれば、次の用例は、いずれも b'—B の用例といえる。

(19) この能力平等観に立てば立つほどその結果として序列偏重に偏らざるをえない。〈タテ社会の人間関係〉

(20) 私がこんな動揺を感じている間に、救世軍のつねとして、主催者の少佐は壇上から未信者の胸にせまるように呼びかけた。〈砂漠の花〉

(21) その頃の習慣として、侍が侍を殺せば、殺した方が切腹しなければならない。〈それから〉

(22) この家では、毎年元旦には家例として、主人夫妻が床の間の正面にすわり、次の間で家扶以下男子、老女以下女中一同が紋付袴で伺候して祝詞を述べ、盃を頂くこととなっていた。〈巻頭随筆 II〉

(23) 試食の際の注意としては(毛虫の)毛焼きを十分にすることである。〈巻頭随筆 II〉

例 (21) についてもっと突込んで考えてみたい。この例 (21) において、B を取り出すのなら、「その頃の習慣として」と比較的容易に取り出されるが、さて A を取り出すという段になると、どこまでを A とするかについて二つの意見が考えられる。その一つは「…切腹する」ところまでとする意見、もう一つは文末の「…しなければならない」ところまでとする意見であろう。ここでは、トシテ I のところで見たと AB 語順可逆の性質を援用して後者を取ることにする。なぜなら、AB 両者だけに視野を限定し、そしてその順序を逆転させた場合、「…しなければならないのが当時の習慣だ」とした方がより原文の意味に忠実だからである。例 (21) の A に立つ句レベルのものを a' としておけば、「侍が……しなければならない」を a'—A として実現されたものと見ることが可能になる。

ただ、ここで注意しなければならないのは a' が複雑・長大化したため、本来文末に位置するはずの C を自らのうちに取込み、文の表面上から消去させたことである。この消去した C を仮に c' としておく。

こうしてみると、例 (19)~(23) はいずれも AB だけによって成り立っている文のように見えるが、厳密に考えると c' はむしろ A の文末表現に形を変えて寄生しているといった方がより正確のようである。例えば、

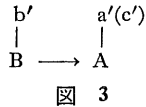
(21)' …切腹することが命じられた。

(22)' …盃を頂くことが行なわれた。

(23)' …毛焼きを十分にすることが必要だ。

と見ることができよう。例 (21)'~(23)' に見られる当為、規則・習慣、必要など意味が、例 (21)~(23) では、それぞれ複合的表現によって担われているのは興味ぶかい事実だが、ここでは、これ以上深入りしないことにする。

図 1 にならってここでとりあげたトシテを図示すると、次のとおりである。



例 (18)~(23) の B に現われる抽象名詞からなにか共通したものを抽出しようとするならば、適当な用語が見付からないが、A に対して一種の解説とでも言うべき意味を持っていると言えるかも知れない。以下、この解説のトシテをトシテ III と呼ぶことにする。

4. 評価基準のトシテ

トシテ I では、B は二次的な格であるため、その必要がなければ省略は可能だ。トシテ II ではトシテが主題提示の機能を持っているので省略されることはほとんどない。次のトシテを含む文では、観察の範囲を以下の形式上の文単位のものに限って考察するかぎり、トシテの省略は行なわれないようだ。

(24) 夏休みの旅の目的地としてこの上ない場所だ。〈夏の休暇〉

(25) そんなセクレタリとして最悪の人物をなぜいつまでも雇っておくのか。〈新西洋事情〉

(26) 酒もタバコもたしなまないにもかかわらず、大変冗談の好きな人物として有名である。〈巻頭随筆 II〉

例 (24) を見て、これに先立って先行文脈において、ある場所についてなにかが言及されているはずだということがわれわれには直感的に捉えられる。この言外に託された情報を復元すると、次のようになる。

(24)' そこは旅の目的地だ。その旅の目的地は最高だ。

こうしてみると、ここで取り上げる文もまた A (そこ) B (旅の目的地) の関係に支えられて成り立っていることが分る。文面上 A は現われなくても文として成立するが、B を取ってしまうと、文末の状態性表現がなにについてある評価がなされたのか不明になる。

このような B 省略による情報伝達の不足はおそらく C がもっぱら状態性の表現によって担われていることによるだろう。状態性表現のもっとも代表的なものは形容詞である。形容詞のうち、つねにその評価がなにに対して下されたのかという情報を文中に盛りこまなければならない

ものがある。例えば、

(27) 彼はこの辺の地理にくわしい。

のクワシイがそれである。この文では、ニ格はむしろ必須的格と言ってもよく、ニ格を取ってしまうと、不完全な文になりやすい。このクワシイと同様に、例 (24)~(26) の中の「この上ない」「最悪」「有名」などの形容詞的な表現も、その評価がなにに対して下されたのかという情報を文中に示さなければならない。そして評価の基準を示すのがトシテであることはいうまでもない。このようなトシテをトシテ IV にしておく。このトシテ IV もトシテハの形で現われることが多い。

(28) 秋としてはいやに薄ら寒い風の吹く日であった。〈暗夜行路〉

(29) 丸山金助は碁は素人としては強い方で、〈射程〉

(30) 加奈子は妻としては幼かったにしても、マンションの管理人としては商人の娘だけあって有能だった。〈二つの家〉

トシテ IV を図で示すと次のとおりだ

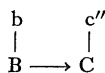


図 4

図4において動作性用言との混同をさけるために、状態性用言を c'' で示すことにした。A は必須のものではないので省略した。

おわりに

以上述べたところをまとめると、トシテには次の四種の意味用法がある。

トシテ I 資格・立場を示す

トシテ II 主題を提示する

トシテ III 解説を示す

トシテ IV 評価の基準を示す

すでに何度も触れたとおり、この四種のトシテはすべて一つの原理によって貫かれている。A = B という同格関係である。同じ原理から多くの意味用法が生まれたのには、次のような理由が考えられる。

1. ABC として実現されている深層にあるものの内容上の違い。
2. このためにもたらされた三者間の力関係の変化。

このトシテ I~IV 間の関係は次のように図示することができる。

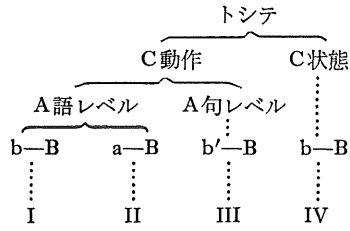


図 5

なお、トシテが同じ原理によって貫かれている以上、中間的な存在も当然現われてくる。ときには、どの用法として分類すればよいか、かなり困難を感じる用例も出てくるかも知れない。いまのところ、こうした中間的文も格助詞的なものであるかぎり、一応図5の I~IV のどこにおさまるようで、紙幅の都合により、これ以上深入りしないことにする。

参 考 文 献

- 鈴木 泰 (1977) 「指定辞トシテ・ニシテの句格」、『松村明教授還暦記念』, 明治書院.
- 永野 賢 (1970) 「表現文法の問題——複合辞の認定について」、『伝達論にもとづく日本文法の研究』, 東京堂.
- 白 継 宗 (1981) 「日本語における動詞性複合格助詞」、『外語学刊』, 黒龍江大学.